

6. ニ ュ ー ス

武蔵工業大学 古 浜 庄 一

1. Beijing International Symposium on Hydrogen Systems

1985年5月7日より5月11日まで中国の北京郊外の友誼飯店(Friendship Hotel)で上記シンポジウムが開催された。会場は詳しくは宿舎が前記ホテルの別館で会場は同じ敷地内にある北京科学会堂の3室を使って行われた。

本シンポジウムは中国の水素エネルギー研究の実情および同国の教育・研究の一端を知るために有益な機会であったために多くの関係者が海外からも来中し、総数は200～300名であったように感ぜられた。その中には世界水素エネルギー学会会長Veziroglu氏、次回、明年度WHEC-6の開催地Wienの責任者Getoff夫妻はじめ世界水素エネルギー学会の有名人のほとんどが各国から招待されて一堂に会した。我がHESSの会長太田先生がご都合で欠席されたことは残念でした。私はそのために代役の榮に何回か浴し、これらの要人から日本のHESSの会員および太田先生によろしくと言葉をかけられた。写真は本シンポジウムのスナップである。

つぎに中国側の受入れ体勢は、首脳陣の中国科学院学部委員、華東石油学院顧問、中国能源研究会理事長、朱亜杰氏、中国国際科技会社中心、中国科学技术協会中心主任 吳甘美氏、および中国科学技术協会副主席 王順桐氏 の指導のもとに全国より100～150人が出席した。

プログラムおよびアブストラクトは粗末な紙に印刷されたもので、両者の間にくい違いも多かったが、熱心な歓迎態勢は海外からの参加者に感銘を与え、全体になごやかな雰囲気と国際友好の実を十分達成したと信じられた。

アブストラクトによれば参加19ヶ国、71発表数、最大は米国の26、西独7、中国と日本が6であった。しかしプログラムでは中国46で全数111である。内容は全体として水素製造と利用法がほぼ半々、一方中国側の発表は製法、エンジン、メタルハイドライドに3分され、私の出席した室ではガソリンへの水素添加の論文が多く、中国の都市でバスやトラック(ガソリンエンジンが多く使われている)が増加したときの排気ガス対策として水素を10%ぐらい混焼して希薄燃焼によって排気の清浄化と熱効率の向上を計るもので、その方向は中央で指導しているように見えた。ただし、この手法は十年ぐらい前に米国のG.M.社で研究したものであるが、中国の各発表データはそれよりかなり良い成績のように思えた。

私はこの後1ヶ月間長春および内蒙古の大学に滞在したが、中国は目下工業技術の進興を強力に進めており、日本などから各専門分野の人を呼んで、その一助にしており、その必要性が高いことが理解された。また一方ではこれら外来技術を消化し、中国独自のものを確立するための教

育，研究，社会体制の即応も一層重要なことのように思われた。

2. ソ連から A. I. Mishchenko 氏の来日

昭和60年8月初めより同10月末まで3ヶ月間ソ連の Ukrainian SSR の Academy of Science, Institute For Problems in Machinery のピストンエンジン部の部長，工学博士 Anatoly Ivanovich Mishchenko が日ソ間の取り決めで学振が世話をされ，私共の武蔵工業大学内燃研究室で水素エンジンの研究のために来日された。私の所では研究室全般の実習と，特に本人の強い希望で，同氏が考案された水素供給法でバックファイヤを防止できると思われるものを単筒エンジンで実験した。私は当初，それは貴国で実験された方が良いのではないかと，私にはあまり興味がないのと言いましたが，本人はデータが取れて大変満足であったようです。

バックファイヤの原因には点火栓による過早着火と残留ガスによるものがあり，私共は前者に注目しておりますが，Mishchenko 氏の方法は後者の対策で，確かに後者によるバックファイヤは彼の簡単な方法で制御でき，私も感心しました。しかし前者によるものはこの供給方法でも私共の昔の実験結果と同じ結果となりました。

つぎに Mishchenko 氏は3ヶ月の間につぎの各所を訪門し，関係の方々に大変お世話になった。

京都大学（池上教授），横浜国立大学（太田時男教授），東京工業大学（神本教授），日本自動車研究所（山口郁夫），工業技術院化学技研（小野修一郎課長），日産自動車追浜工場（鶴田光男部長）。

また10月25日には HESS の研究会でソ連における水素エネルギー研究の情勢に関する講演もしました。

在日中の日本に対する印象を尋ねた答としては，日本の大学の研究室は狭くて豊かでない（私共も含めて）が基礎的研究レベルが高く，帰国後その方面の研究を始めたい。JARIや国の設備は大変立派である。また自動車の量産の実情には驚いておりました。

さらに一般生活では日本人の生活レベルは高く，親切でサービスが非常に良い。関係の方々に感謝しますとのことであった。私からもお礼を申し上げます。

3. 私の ASME（米国機械学会）からの Soichiro Honda Medal 受賞について

本賞の対象はつぎのように記されています。

The award recognizes an individual for an outstanding achievement or a series of significant engineering contributions in developing improvements in the field of personal transportation.

また私の受賞理由は

“ In recognition of more than thirty-five years of significant research and development in vehicular engine design and the use of hydrogen as an alternative fuel for internal combustion engines. ”

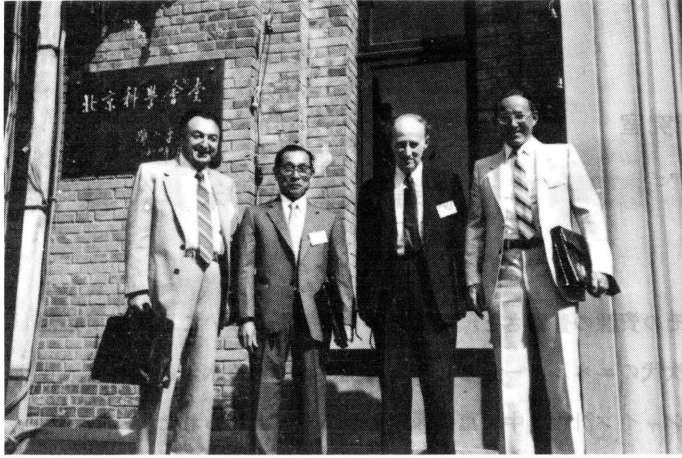
であり、私共の液体水素ポンプによる高圧噴射水素エンジンが学術的権威の高いASME で評価されたことに対して大変喜んでおります。また、長い間私共の研究にご支援、ご指導いただいた HESS の皆様に感謝しております。



1. 友誼 飯店 別館



2. Opening session



3. 北京科学会堂の前での Veziroglu 会長（左端）その他



4. ウィーンの Getoff 夫（左）妻（右端）



5. 朱理事長（右）と
Marchetti（左）氏



6. 王順桐副主任（左）と筆者（右）